



TITLE:

<批評・紹介> 長廣敏雄著 「支那工
藝史に於ける帶鉤の研究」

AUTHOR(S):

岡田, 芳三郎

CITATION:

岡田, 芳三郎. <批評・紹介> 長廣敏雄著 「支那工藝史に於ける帶鉤の研究」. 東洋史研究 1943, 8(3): 195-197

ISSUE DATE:

1943-08-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138858>

RIGHT:

支那工藝史 帶鉤の研究 長 廣 敏 雄 著
に於ける

(東方文化研究所報告第十八冊)

昭和十八年一月 京都桑名文星堂發行
B 6 判圖版四九本文一九一頁 定價金拾八圓

古代支那が世界に誇る諸種工藝的所産の内にあつて、その裝飾性の華麗と豪奢とを以て一きは我々の目を惹くものに彼の帶鉤がある。もとよりそれは元來が服裝の用具である以上我々は

帶鉤を廣くは銑具の一類として考察すべきものではあらう。然しそれには單なる實用をはるかに越えた極めて高級な裝飾性が附與されてゐるのであつて、そこにこのものの持つ高い史的意味が考へられなければならない。

既に早く藝術意欲なる超個人的・社會的意味を含めた概念を提示して古代文化に於ける工藝の、技術を越えた精神性を力説したアロイス・リーゲルの説を認め、東亞の美の本質を問ひ、その精神史的意味の把握に努力されつゝある著者が、帶鉤を取り上げたのも、それは實にこの意味に於てであつて、従つて本書は帶鉤なる特殊遺物の研究であると共に、又それは大きくは著者の支那古代工藝史論であるといふ事が出来る。

何れの美術史的考察に於ても史料がその性質上、多く諸蒐集家の手に秘藏されてゐて、觀覽を許される機會に乏しい事は研究者に取つて第一の苦しみである。而も支那に於ける考古學的研究のもつ根本的な不幸は、その基礎史料となるべき學術的發掘品を殆んど失ひ居るのであつて、従つて諸家集藏品の丹念な調査、資料の蒐集が研究者に取つてはその基礎的な仕事となつて來ねばならない。

第一章帶鉤の形式は、昭和四年以降絶えず續けられた著者のかうした努力の結晶であつて、こゝでは蒐集の基礎資料にもとづく形式分類が試みられてゐるが、先進の未だ手を附けなかつた對象であるだけにその苦心の程がうかがはれる。殊に卷末に

附した聚成圖十二葉は著者が自ら實測したものであつて、もとよりこれは本章の内容と相表裏することは言ふまでもない。そして著者が三孤狀帶鉤についてその曲線曲面が豊かに延びつゝ視覚的な重味を末端近くにもり上げてゐる構成の美を説いてゐる如く、正側両面の示す構造がこの考察には又基礎的な役割を果す以上、我々はそこにこの聚成圖のもつ貴重な意味を讀まなければならぬ。

第二章は、前章の形式分類の間に自ら把握されたその實用を超えた部分、即ち裝飾意匠についての考察、分析であつて、第一節には浮彫的意匠を、第二節には平面的裝飾を取扱ふ。そして次の第三章では進んでそれらの様式的考察を試みられ、乏しい乍らも今日知りうる限りの發掘遺跡にもとづいて、以上の分類に對する年代乃至地方色の問題が考へられ、戰國式及び漢式帶鉤の様相と特色とが明かならしめられてゐる。

以上によつて帶鉤研究の基礎史料を整理した著者は、第四章以下に於ては、いよ／＼その工藝史的意味の考察に進み、先づ第四章に於ては恰も言語の概念に於けると同じく、裝飾も一の意味構造を持つものであつて、それは形象のかたちで語る言葉ともいふべく、そこに言語では言ひ現はせない原本的な造形意志のあらはれのある事を説く。即ち「形式語としての裝飾モチーフ」これが本章の問題であつて、帶鉤上に見るその神祕・象徴的な抽象的意匠になる獸面、獸首、虺龍、幾何學文等の裝飾モチーフが吟味せられ、一般的な古代支那の裝飾文様の發展

に於けるその位置が考へられて、こゝに殷周の統一傳統的形式に對する周末の多元をもたらし、更に次第にその一元化に向ひゆく戰國樣式漢樣式の形式世界が論ぜられるのである。

次の第五章は帶鉤がこの形式語に於て語る意味世界を廣く文化史的意義に於て考へるものであつて帶鉤に關する諸文献を引證しつゝ、周銅の簡古嚴肅に對する戰國式帶鉤の示す柔軟性や生氣性、華美性、乃至は漢式のそれが示す規格性は、それが畢竟文字によらない周漢の社會生活の現れに外ならない事を論ずる。

さて以上によつて帶鉤上に展開された美術の精神乃至その文化史的な關聯を究めた著者は次の「周漢美術の背景」に於て、更に廣く、この神祕的にして象徴的な裝飾紋様を古代支那文化そのものの特質の造形美術上に於ける表出として吟味を加へてゐる、そしてそれが古代人の外界への恐れ、直觀苦にとぢた生からうまれた特殊な抽象性の流れにそふものであつて、やがて思想の進展につれ超越的なものがこの抽象性を裏付けるところ天の思想ともなり、又張彥遠のいふ骨氣ともなるのであつて、そこに古代支那の精神乃至世界觀ともいふべきものが汲まるべき事を説く。

以上本書論旨の要項をば大約紹介し來つたが、それは支那工藝史上に於ける帶鉤の研究であつて著者自身も述べられてゐる様に帶鉤そのものの研究としては、なほこの他にも問題は存す

る事であらう。然し我々が美術精神史の問題乃至方法として、そこに學ぶべきものの多い事は勿論、又その間に探究すべく示された課題も蓋し多い。殊に結論たる第五章は古代支那の「生」に關する根本的な問題にふれるものであつて、ひいて又それは東亞文化の本質にも關する以上、そこに我々は一層本書が提起する問題の深さを思はねばならない。

そして又かうした單なる物珍らしき美しき工藝品とも見ゆるものにも、著者が示されたる如き深き歴史の意味がひそみ、そこには言語が傳へ得ない様な古代人の生活や思想の本質にふれるものが存するとすれば、そこに我々は又かゝる歴史考古學の荷ふべき役割の重大さを思はねばならないであらう。

〔岡田芳三郎〕